

〈特集①:自律学習の今 —台湾の教育現場から—〉

# 自律学習支援の一方法

—多読指導の試み—

武藤泰子

## 0. はじめに

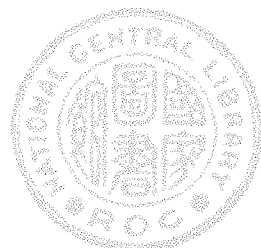
多読の実践について知ったのは、2009年の1月に行われたNPO法人日本語多読研究会主催の「読み物作成ワークショップ」に参加したことがきっかけである。そこで、まず多読指導についての説明、実践の紹介があり、多読教材作成の方法についてレクチャーがあった後、ワークショップ参加者たちで多読読み物を作成した。読み物作成は、既存の物語を、学習者が読みやすいように読み物で使用する文型・表現、語彙に制限を加え、その制限の中で書き換えていった。このようなライト作業は、通常の授業で、例えば新聞記事やインターネット上にある記事を使う場合、学生にとって難しいと思われる部分を多少書き換えて教材にして授業中に配布する時の作業と似ているものである。それを、レベルごとに基準を決め、不特定多数の学習者にわかりやすく書き換えていく。ワークショップの教材作成時に、語彙の書き換え等を参加者で議論しながら行っていったが、その時に、台湾の学習者なら漢字で意味がわかる語彙も少なからずあるので、漢字圏以外の学習者に比べ、読むことで得られるものの可能性は広いのではないかと感じた。

このワークショップ参加後、担当クラスの学生を対象に、97学年度の第二学期から多読指導を開始した<sup>1</sup>。本稿では、まず、多読指導について紹介し、環球技術学院進修院校<sup>2</sup>の応用外語科日本語組二技課程で行った多読指導の実践について、その方法と学生の状況を述べる。

## 1. 多読とは

### 1-1 多読指導の概要

「多読」は、もともと英語教育で進められてきたものである。日本では最近多読への関心が高まっているようで、大型書店で「多読コーナー」が設けられ、英語学習者向けの多読教材が目につくところに置かれているところもある。



日本語教育での日本語多読研究会が行っている「多読」は、酒井邦秀氏が英語教育で実践している「100万語多読」を応用したものである。「100万語多読」の100万語は、読んだ本の語数の総数の目標を100万語としている。

酒井(2005)によれば、多読の目的は、「大量のインプット」を行い、精読の基礎を作り、発信のための英文を体にためることである。またその特徴は「ごくやさしい薄い本から始めること、そして個別指導」であると言う。多読指導を簡単に言うと、教師は、多読指導用の教材(本)を用意し、学習者は一番簡単な教材から、個々に好きな教材を読み始め、各自のペースで徐々に難易度を上げて教材を読み進めていく。最終的に目指すのは一般向けの本が読めるようになることである(日本語多読研究会2008)。多読で使う教材は、外国語学習者向けに書かれたレベル別教材(graded readers)をはじめ、児童書や一般書などがある。教材には、「読みやすさレベル」という目安が、一番簡単な0から段階ごとにつけられている。最初は誰もがレベル0から始め、各自のペースでレベルを順番にあげていく。学習者は、読んだ日の日付、本のタイトルなどの読書記録をつける。教師の役割は、学習者を観察して状況を把握し、個別指導を行うことである。

## 1-2 多読指導の原則

多読指導には3原則があり、それは、

- 1、辞書は引かない
- 2、わからないところはとばす
- 3、合わないと思ったら途中ででもどんどんやめる

というものである。

「多読」では、頭の中ででも翻訳せずに原文のまま理解すること、快適な速さで読むことを推奨している。「辞書を引く」動作は、この二つの大きな妨げとなるものである。一つの教材を正確に読む「精読」ではなく、快適な速さで読むことで大量のインプットを目指している。また、個人のペースで楽しく読み進めることが基本で、楽しく読むことにより継続して読むことができ、継続して読むことによって、大量のインプットがなされることを目的としている。



## 2. 多読指導の実践

### 2-1 学生の背景

環球技術学院の進修院校は二専課程が以前からあったが、97学年度から二技の課程が始まった。学生数は、第一学期開始当初22名、第二学期は19名<sup>3</sup>という比較的小規模なクラスである。筆者はこのクラスで、一学期二学期ともに「日文寫作」2時間「日語溝通技巧」4時間の計6時間を担当していた。小規模なクラスではあるが、学生は、年齢や仕事の有無、日本語能力等、実に様々である。日本語能力に関していえば、日本語学習を全く0から始めた学生もいれば、二専の課程で二年間学んで進学してきた学生、さらには既に日本語能力試験3級を取得し2級を目指している学生もいる<sup>4</sup>。仕事等の関係で授業に欠席しがちな学生もいる中で、授業に定期的に出席してくる学生は、全般的に学習意欲が高い学生が多いが、平日は仕事をしている学生も多く、授業時間以外に学習時間を取るのが難しいと言う学生もいる。

### 2-2 多読指導導入の動機

筆者が多読指導をこのクラスで行おうと思ったのは、前述のように学生の日本語能力に個人差がかなりあり、個々のレベルにあった指導が必要なこと、また、学生たちは日ごろから学生同士で情報を交換し合い、日本語に関する教材を各自が購入して勉強している風景が見られていたので、授業時間以外でも学習する意欲は十分にあると感じられたことだった。学習意欲は十分にあるのだが、平日は仕事等が忙しく時間が取れない学生、学歴がほしいわけではないのであまりストレスを感じずに楽しく学びたい学生などもいて、宿題等の多くの課題を出すことにためらいがあった。また、授業中話すことには抵抗があったり、聴解には困難さを訴える学生も多いが、読むことには抵抗が少なく、逆にもっと何かを読んで勉強したいと考えている学生が多い。授業の課題だけでは満足せず、もっと多くのことを学びたいという意欲がある学生に、授業時間外にどのような学習を教師が提供できるかを模索していたところ、多読のワークショップに参加して多読のことを知り、このクラスの学生たちには個別に読むことを指導する多読はいい方法なのではないかと考えた。

### 2-3 本の準備

まず、本を準備しなければならない。最初に準備した本は「日本語聴讀文庫」<sup>5</sup>のレベル1か



ら4までのシリーズで、1シリーズに5冊入っており、全部で20冊である。それだけでは足りない  
ので、学校の図書館に入っていた本を多読用にリライトし、1種類用意した。多読授業としては、  
かなり少ないものであるが<sup>6</sup>、予算があるわけではないので、これでスタートし、様子を見ること  
にした。リライトした読み物は、学期中も作成を進め、最終的には4種類作成した。

次に、置き場所であるが、学生は土曜日と日曜日のみに学校に来るので、校内に決まった  
教室、学生たちのスペースがあるわけではない。本もあまりたくさん準備できなかったことか  
ら、学生の代表一人に預け、毎回、授業の教室にもって来てもらうようにした。

学生に読書記録を書いてもらうように、記録用紙を作成した。記録用紙には、本のタイトル・  
読み終わった日・感想／メモを書く欄を設けた。感想は、日本語で書いても中国語で書いても  
よいことにした。

## 2-4 実施状況

授業時間内には特別に本を読む時間を設けず、基本的に学生が自宅に本を持ち帰るなど  
して、あいている時間に各自で読み進めてもらうことにした。学生には読書記録をつけてもら  
うが、読書記録の提出を含め、多読に関しては成績とは一切関係なく、学生の自由に任せるこ  
とにし、学生にもそのように説明した。

最初にまず多読について説明し、「辞書を引かない」「わからないところは飛ばして読む」  
「つまらないと思ったらやめる」という三原則も理解してもらった。記録用紙を各自に配布し、書  
き方を説明した。

記録用紙は、本を読んだ週は、毎週見せてもらうようにした。本は、教室の前の空いている  
机の上に、毎回、並べておくようにした。

### 2-4-1 学生の多読の状況

授業中に読む時間は設けなかったが、読書記録を見せてもらったり、本の貸し出し時に、ま  
た、休み時間に読んでいる学生もいて、それらを通して、学生の状況を把握するように努め  
た。教室で見られた学生の多読の実施状況について、以下に述べる。

#### ①本を読んで涙を流す



最初の授業で多読の説明をしたすぐ後の休み時間に、早速学生たちが集まって、各自で好きな本を手に取り始めた。気に入った本を見つけて、自分の席に持って行き読み始めた学生もいた。本を読むことによりかなり積極的な様子を感じられた。気がつくと、最初に本を手にした学生が、本を読みながらぼろぼろ涙を流していた。何を読んでいるか尋ねると「象のトンキー」で、「かわいそう…」とつぶやいた。周りの学生も驚いていて、多読実施の初日として、かなりインパクトのあった光景だった。

#### ②わからないところは解決したい

2週間が過ぎた後、クラスの学生代表が「本を人数分コピーしてみんなで同じものを読みたい」と言ってきた。理由を聞くと、わからないところがあるから、みんなで同じものを読んで助け合って理解したいということだった。学生同士で話し合ったようだ。学生には、「わからないところがあっても飛ばして読む」という原則を再度説明し、難しすぎると思うものは読まなくていい、少しわからないところがあっても全体の意味がわかるのならわからないところは気にしない、ということを伝えた。

#### ③辞書から離れられない

「わからないところは飛ばす」というのは、学生にとっては難しいことであった。休み時間に読んでいる学生を見ても、辞書をひいていることがあり、また、借りていった本に鉛筆で書き込みをして、返却する前に慌てて消しゴムで消している学生もいた。その学生に聞くと、知り合いの日本語ができる人にわからないところを教えてもらったということだった。その都度、辞書は引かないように、難しかったらその本はやめて他のものに交換するように、と学生に話した。

#### ④感想を交換し合う

休み時間が本の返却貸出時間になっていたが、本の周りに学生が集まってくると、この本は面白かった、この本は難しかった等、学生たちの間で情報交換されていた。どの本にしようか迷っている学生に、他の学生が「それは面白かったよ」と言うのを聞いて借りていく学生も見られた。

「ハチの話」<sup>7</sup>を読んで、「先生は死んだの？」と他の学生に聞いて、既にその本を読んでいた



た学生から「絵を見ればわかる」と指摘された学生がいた。その学生は挿絵は全く見ずに日本語部分だけを読んでいたようだが、読むときに挿絵も読むことの助けになることを他の学生から学んでいた。

#### ⑤知っているストーリー

学生にとって、全く知らない話よりも、多少知っている話を書いてある本のほうが手に取りやすいようである。「桃太郎」「一休さん」「浦島太郎」などの昔話で馴染みがあるものは学生がよく手にとっている。また、翻訳物は原著者と題名を見て、知っている話だとわかると、じゃあ読んでみようかと借りていった学生もいた。

### 2-4-2 教師の指導

多読指導の中で、主に心がけていたのは、読書記録を受け取ると同時に学生に質問をしたり話をしたりすることによって、学生の状況を把握することだった。学生には、面白かったか、難しかったか等を質問し、面白くなかったという学生には、別の種類の本を進めた。例えば、結末がはっきりしないストーリーだと、日本語としては簡単なのにわかった気がしないと多少の苛立を感じている学生もいた。読書は好みもあるので、そのような学生には、わからないのは日本語の問題よりも読書の好みの問題なので、ストーリーが明確なものや説明文を勧めた。難しかったという学生には、無理して読む必要はなく、難しかったら読まずに返して構わないし、途中まで読んでも、読書記録につまらなかったとか難しかったと書いて提出すればよいことを伝えた。多読の三原則は、簡単でわかりやすいものだが、実際に実行するのは、前述したように、「辞書を引かない」も「わからないところは飛ばす」も「途中でやめる」も、学生にとってはかなり抵抗があるようで、何度も言い続けた。「わからなくても飛ばして読んで辞書を引かない」というのは、今までの学習のスタイルからはかけ離れたものであるからだろう。妥協案として、「とにかく、読んでいる間に辞書は引かない。どうしても辞書を引きたかったら、本を読み終わってからにしてほしい」ことを伝えた。難しいと感じた本は、今は難しいかもしれないが、後で読めば簡単に読めるかもしれない、今難しいものは、とりあえずおいておいて、他のものを読んだほうが良いと話した。

また、わかったかわからないか、興味を持ってただけでなく、読んだ本の内容について話を



することで、なるべく「多読」を読書として楽しんでもらおうと心がけた。学生が本を選ぶ際に本の内容について簡単に紹介することも多くあった。

最初のうちは、学生も自分からよく借りに来ていたが、次第に本の周りに集まる学生数が少なくなっていった。その時は、学生全体に「今日は、他に本借りる人いませんか」と声をかけると、またみんなが集まって来ていた。借りた本が忙しくて読めず何週間か借りたままになっていた学生もいたが、継続して何かをする時には、停滞する時もあり、仕事等が忙しくて時間がないこともあるだろう。そのような時に、少し時間を置いてもまた再開できるように、教師が刺激を与えたり励ましたりすることも必要である。

### 2-4-3 リライト読み物

多読指導開始時に、学校の図書館にある児童書から1冊選んでリライトした。リライト用の本を選ぶにあたっては、あまり書き換えをしないですむような元々学生にとってわかりやすいと思われる文章で、さらに挿絵があり、挿絵が内容理解を助けるもの、ストーリー性がありストーリーが単純でわかりやすいものを選んだ。

リライトの際には、参加した「読み物作成ワークショップ」で配布された「多読テキスト用文型・表現 分類(試案)」を参考にし、学生が現在授業で使用している教材のレベルを念頭<sup>8</sup>に、使う文型・表現を選んだ。ワークショップでは、レベル別の単語表も配布されたが、学生が漢字で理解可能なものもあるので、漢字表記で理解できるものは単語表にないものも多く取り入れた。

本の挿絵も理解の助けになるため、日本語多読研究会の実践例の紹介の際には、既存の本に文章部分にリライトした文章を貼りつけているということだったが、図書館にある本を利用するので、貼り付けるわけにはいかない。そこで、別刷りで印刷した。

作成時は、A4用紙に縦書きで、教科書体フォントで18ポイントの字の大きさにし、ふりがなを9ポイントの大きさにしたが、最終的には「日本語聴讀文庫」の大きさに合わせ、全体をB5版に縮小して印刷した。

何人かが最初に作成したリライト読み物を読み終えたところで、リライト読み物についての感想を聞いたところ、字の大きさはよいが、縦書きが読みにくいという意見が多くあったので、次の作成から横書きに変更した。また、カタカナにふりがなをつけていなかったが、カタカナにもふりがながほしいという要望があったので、つけるようにした<sup>9</sup>。



最初の物語のリライト読み物に加え、物語2種類と説明文1種類の3種類を増やした。それぞれ、一つの読み物は、字数4000字前後、ページ数は挿絵なども含め20ページから30ページ程度になった。

### 3. 読書記録及びアンケート結果

学期の最後に読書記録(提出後返却)及び記名式のアンケートを行い、提出してもらった。アンケートは、25冊の本それぞれについて星5つで評価してもらった。さらに、辞書をひいたかどうかなど、個々の読み方に関するもの、多読に関するの全般の感想を5段階(5非常にあてはまる、4あてはまる、3普通、2あてはまらない、1全くあてはまらない)で記してもらった。履修者19名のうち、読書記録は12名、アンケートは13名から提出があった<sup>10</sup>。

#### 3-1 読書記録及び読んだ冊数

アンケートの記載と読書記録から、学生の読んだ冊数を見ると、4~6冊程度読んだ学生が8名で大半をしめ、最も読んだ冊数が多い学生は16冊、次いで14冊であった。読んではいらぬが、読書記録に全部を記録していない学生もいた。

「感想／メモ欄」は、日本語で書いている学生、中国語で書いている学生、時々日本語で書く学生と様々であった。内容は、本の簡単な内容のメモや「よみあげた。でもわからない」「看懂80%。速度15分。回数10次(理解度80%。速度15分。読んだ回数10回)」等自分の読み方を記録したものもあった。

#### 3-2 アンケート

アンケートは13名の学生から回答を得た。

まず、25冊の本・読み物、それぞれについて面白かったかどうかの評価をもらった。その結果を見ると、読んだもの全て、或いはほとんどに「面白かった」の5の評価をしている学生が6名、読んだもの全てが2の評価だった学生が1名、本それぞれに1~5までの様々な評価をしていた学生が3名、記述がない学生が2名だった。辞書を引く学生が多かったことから、実際に辞書を引いたかどうかを質問したところ、「辞書で調べなかった」に「非常にあてはまる」と答えた学生は2名だった。その他の学生は、「読みながら調べた」に「非常にあてはまる」の5、或





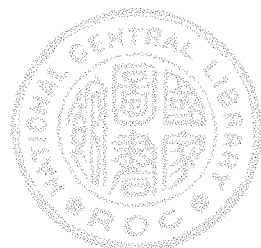
いは「あてはまる」の4をつけたものが合わせて5名であった。辞書を引ながら読んでいる学生が依然として多いことがわかる。また「わからなくても調べなかった」は、「あてはまらない」が7名、「全くあてはまらない」が3名であり、10名はわからないときには調べていたと回答している。読みながらではないにしても、わからないことがあった場合には、何らかの形で調べている学生がほとんどであった。

「多読は難しかったか」については、「あてはまる」が3名、「普通」が2名、「あてはまらない」3名、「全くあてはまらない」4名、回答なし1名と評価がわかれている。この難しさは、学生の日本語能力とは必ずしも関係していない。「全くあてはまらない」(難しいと感じなかった)と回答した4名のうち、入学当時既習者だった学生は2名、未習者は2名であり、「あてはまる」(難しいと感じた)と回答した3名は、既習者1名、未習者2名である。難しいと感じていた既習者の学生は、本についての面白さの星の評価を見ると、5が1冊、4が3冊、3が5冊で他の学生たちの評価に比べ、低いものが多い。この学生は前述の「ストーリーがはっきりしないとわかった感じがしない」と言っていた学生であるが、内容に興味を持てずわかった感じがしないので難しいと感じたのではないかと考えられる。

「多読は面白かったか」の質問には、「非常にあてはまる」が6名「あてはまる」が7名、「これからも多読を続けたいか」という質問には、7名が「非常にあてはまる」5名が「あてはまる」と答えており、全体として概ね好評であったことが伺える。自由記述の欄に「雖然我讀的是最簡單的級數，但讓我進步了很多了哦(読んだものは簡単なものだったが、日本語が向上した)」と書いている学生もいた。

### 3-3 多読が最も進んだ学生

読んだ冊数が16冊、14冊と多い学生2名は、アンケートを見ると、「わからないところがあっても調べない」と答えた学生2名で、辞書を引かずに読み進めて、多くの本が読めたようである。16冊読んだ学生は、面白さの星の評価を見ると1か5の2種類で、かなり好みがはっきりしており、また、物語は読んでいるが、説明文のものは全く読んでいなかった。14冊読んだ学生は、5から2まで様々な評価をしている。この2名は、1名は未習者もう1名は既習者であったが、多読を行う前から、休み時間には自分の持ってきた本を読んでいた学生たちである。元々読書が好きで、多読もその読書の延長で取り組むことができたのではないかとと思われる。



#### 4. 反省及び今後の課題

学期途中から始めて9週間という短い期間だったが多読指導を行い、概ね好評な評価を受け、手応えを感じた。

今回多読指導をしているの一番の反省は、本の少なさである。本来は、簡単な本からスタートするのが多読の方法であるが、用意できた本・読み物の数が少ないので、全ての学生が簡単な本からスタートすることができない状況であった。その為、簡単なものから難しいものへという段階をおった読み方は難しく、今あって借りている人がいない本の中から、興味のあるものを手にとることになった。また、読書の好みもあるので、個々の学生が面白いと思うことができるためには、内容もバラエティが必要である。学習者用にリライトされたものだけでなく、一般書の中で学生にとって読みやすいものを用意できれば<sup>11</sup>、見たところもバリエーションがあり、興味を持ちやすくなるのではないかと思う。

授業中に読む時間を設けなかったが、毎週ではなく、一度か二度でも、授業の中で読む時間を設けることも必要であると思う。学生がどのように読んでいるかは、実際に読んでいる状況を見ないとなかなか把握するのが難しいことがその理由の一つである。また、普段の授業中だとわからない言葉があった時には、すぐに辞書をひく習慣になっているが、その習慣から離れて、辞書を引かずに読み進めることを実際に体験してもらうことが必要なのではないかと思う。授業中に強制的に辞書を引かずに読み、わからない単語があってもとにかく読み終える体験をすれば、自宅で読む際にも辞書を引かずに読んでいけるのではないかと思う。

知っているストーリーの本を手にとる学生が多く、また学生同士で内容を聞き合っただけを参考に借りる本を決めている学生もいたので、読書記録の感想を学生同士で共有できるような体制を作れば、学生が本を選ぶ際に参考になるだろう。

英語の「100万語多読」では、1分間に読む単語数を測りレベルをあげる目安にしていたり、100万語という単純な目標があったりと、読み進めていくステップも目標もわかりやすい数字的な指標があり、個別に学習がしやすい。日本語での多読ではそのような指標がないが、目標だけでも、例えば「〇ページ読む」や学生が読書記録で読んだ時間を記録していたが「〇時間読む」という目標を定めて、それを目指して現状を記録していくようにすれば、記録を見て達成感を感じることもできるし、個別の学習の励みにもなると思う。



## 5. 終わりに

学生たちから続けてほしいという要望もあり、多読指導は、98学年度も上記のクラスで継続して行っている。本も、日本語多読研究会から出されている本を買い足し、65冊になった。新学期に新しい本を並べたときは新鮮さがあって読む学生も多かったが、1か月もすると停滞してしまい、借りる学生も少なくなる。声をかけたり、本の紹介をしたりしながら、学生を励まし続けている。まだまだ本の本数は足りないが、できる範囲で環境を整えながら、今後も行っていきたいと考えている。

(むとうやすこ 環球技術学院応用外語系 専任講師)

### 注

- 1 学期途中から開始し、学期最後まで9週間。
- 2 土曜日と日曜日に授業が行われる課程。
- 3 欠席しがちな学生もいて、普段の授業の出席者は概ね15名程度。
- 4 19名のうち、一学期開始時に日本語未習者だった学生は9名。
- 5 「日本語聴讀文庫」大新書局発行
- 6 40人クラスで授業を行う場合には最低200冊は必要(酒井2005)
- 7 忠犬ハチ公のストーリー。「先生」はハチ公の主人。
- 8 学生の使用している教科書は「日語溝通技巧」では「日本語集中練習」(大新書局)、別の文法の授業では「大家的日本語 進階Ⅱ」(大新書局)。
- 9 「日本語聴讀文庫」はカタカナにもふりがながついている。
- 10 読書記録もアンケートも提出しなかったが、休み時間に読んでいた学生が他1名いた。
- 11 「多読のすすめ」に多読向き一般書リストがあり、52種類の本やマンガが紹介されている。

### 参考文献

酒井邦秀(2002)「快読100万語！ペーパーバックへの道」筑摩書房

酒井邦秀・神田みなみ(2005)「教室で読む英語100万語」大修館書店

NP0法人日本語多読研究会編(2008)「多読のすすめ」

NP0法人日本語多読研究会監修(2009)「日本語聴讀文庫」Level 1～4 大新書局

